

# 近世期における相模大山御師の形成過程

——出自と取次回路——

飯 田 隆 夫

はじめに

相模国大住郡の古義真言宗寺院の大山寺は、不動明王を本尊とし御神酒講をはじめとする数多くの大山講が結成され文化・文政期に最盛期に達した<sup>①</sup>。この大山信仰は、山中の不動明王や山頂の石尊権現のご利益が流布され、この二所聖地へ多くの参詣者が群集した。この大山講の発展には門前町に集住した大山御師の盛んな檀那場への働きかけが何よりも大きい。

相模大山信仰の中で、大山講の地域的分布や規模に関しては、有賀密夫「大山門前町の研究」<sup>②</sup>、田中宣一「相模大山講の御師と檀家」<sup>③</sup>、鈴木章生「相模大山信仰の成立と展開」<sup>④</sup>などの研究に詳しいが、豊臣秀吉の小田原攻め以前、大山寺領内に存在した修験者・山伏が、近世期以降御師に転身し、その御師の形成過程に関するまとまった研究は、殆んどなかった。

一九九〇年代末以降、それまで近世的身分の通念であった「士農工商の社会」を問い直す研究が塚田孝・高埜利彦・吉田伸之らの研究によって急速に展開された。近世のえた身分・非人身分の研究を端緒に、公家・寺社を本所とする神職・陰陽師・修験・鋳物師などの研究から、都市の下層に暮らした鳶・髪結・日用・振売などを対象とす

る研究へ発展し、シリーズ『近世の身分的周縁』へ結実した。<sup>(5)</sup>

これら一群の研究のなかで、高埜利彦は、富士御師の研究を駿河国駿東郡の須走御師<sup>(6)</sup>と甲斐国都留郡の川口御師<sup>(7)</sup>を事例に御師の身分的転換の研究を発表した。高埜の研究は、富士山信仰における百姓・神職から御師に転じた者の在り方を論じたが、これに対して本論の論考は、近世初期以降、山伏・修験らの御師化、御師と寺院との関係性などについて相模大山の一事例を明らかにする。

史料紹介として大山寺・御師に関する圭室文雄の「近世の大山信仰と御師の組織」がすでに公表されているが、これは山伏から御師への形成過程、大山寺との関係性の解明までには至っておらず、本論は、手中正所蔵「大山寺社稷丸裸」や大山寺別当八大坊が下した山法を再構成してこれらの点を明らかにする。

## 第一章 妻帯・山伏の排除と御師の発生

### 1 徳川家康掟書と山伏・修験者

天正一八（一五九〇）年、豊臣秀吉は全国制覇の総仕上げとして関八州支配をしていた小田原城の北条氏を滅ぼした。その後、小田原攻めに勲功があった徳川家康により関東一円の支配が及ぶこととなった。秀吉の小田原攻め時に、大山寺山内に集住していた修験・山伏は北条氏政・氏直の戦力として参戦していた。家康は、関東支配の地歩として北条氏の戦いに加わった大山寺内の修験・山伏を排除し、大山寺に硯学領・寺領を与えた。

近世初頭の大山寺は、古義真言宗寺院として再興するため、大住郡平塚成事智寺等覚院出身の実雄が八大坊初代別当に就任し、慶長十四年八月以降、幕府や本山の高野山遍照光院から掟書・法度が相次いで発せられた。実雄は、同年八月十五日、「関東中本寺方論議所化衆条々掟」を高野山遍照光院頼慶、豆州走湯山般若院快運らと作成し二十八日、駿府城御前で奏上した。<sup>(10)</sup> これを受けて、慶長十四（一六〇九）年八月廿八日、大山寺別当八大坊に対し徳

川家康は、次の内容の黒印状を下した。

〔史料1〕<sup>①</sup>

定

一 従前不動上者、永代清僧結界之地堅可相守事

一 以前妻帯并山伏在家居住之屋敷者、自別當八大坊清僧之分可申付事

一 十二坊ニ自前々付來諸檀那并山林諸堂散錢等、一物無相違可為清僧進退事

右守此旨、向後偏可有佛法興隆者也

前不動は、山中の大山寺本堂・本地堂・明王堂が占める寺域入口と山下の坂本村との境に位置する寺である。この前不動より山上の寺域を清僧が専ら支配する結界の地と定め、妻帯僧・山伏・在家出家者などの立入を禁じた。それまで供僧十一か寺<sup>②</sup>に寄せられた檀那や山内諸堂の賽銭はすべて八大坊清僧の硯字領として保障された。<sup>③</sup>この掟書が近世を通して大山を規定する山法となった。第二条という妻帯并山伏在家居住とはいかなる人びとであったか、小田原城陥落直後の資料を辿ってみる。

〔史料2〕<sup>④</sup>

一 地下人百姓等、急度可令還住事

一 軍勢甲乙人、立歸百姓家、不可陣取事

一 對土民百姓、非分之儀申懸族有之者、可為一錢切、并麥毛不可苟取事

右、若於違犯之輩者、早可被處嚴科者也

史料は、豊臣秀吉が天正十八（一五九〇）年四月、大山寺坊中宛に発した掟である。大山寺山内の地下人・百姓らを小田原合戦に加担した北条氏の軍勢として大山へ帰山を命じ、土民百姓へ狼藉に及ぶ者は一錢切するという内

容である。「史料1」で指摘された妻帯僧・山伏・在家者は、大山寺山中に集住した宗教者であると同時に戦時の人足として駆出された人びとである。

この天正十八年当時、山中には、山伏一二名、俗人三六名が居住していた。<sup>①</sup>表1「近世初期の大山寺山内居住者」がその内訳である。俗人のほとんどは官途成を名のり、寺坊は、八大坊藏屋敷・大用寺住居・大勸進抱屋敷・山之坊抱屋敷・上之坊抱屋敷などがあった。さらに、慶長元（一五九六）年、開墾し年貢納入者三二名がこの史料に見られ、うち四名は天正一九年の俗人と重なる。すなわち、豊臣秀吉掟書以降、関ヶ原合戦後の慶長十四年までの間には、大山寺坊中に山伏一二名、俗人三六名、年貢納入者三二名が存在し、総勢八〇名の者が慶長十四年八月、徳川家康掟書の対象者であった。

表1 近世初期の大山寺山内居住者

①天正十九（一五九一）年大山寺領内居住者

大山寺領						外二、俗名前如左					
天正十九年辛卯御繩帳云						五郎左衛門					
御役人 彦坂九兵衛様						○左京					
右其節山伏寺々并俗名前之						治部左衛門					
者左之通、此外ハ其時分無						○助之進					
之事分明也、尤山上住居之						○坂田					
者ハ無之候也、向後相心得						中山因幡					
事專一也						(内海式部祖先 四郎左衛門					
連鐘坊	吉之坊	真如坊	龍泉坊	来存坊	真光坊	○右近					
吉祥坊	正玄坊	大藏坊	成田坊	悦善坊	上泉坊	○歌之助					
						○兵部					
						○大木宮内					
						○土佐					
						○掃部					
(大隅とも) 中務											
						○波多野					
						○印部					
						○図書					
						○主膳					
						○監物					
						○大膳					
						○帶刀					
						○箱崎					
						○根岸					
						神主					
						社人惣右衛門					
						○大学					
						○村山					
						○大倉					
						○酒井					
						○藏人					
成就庵・正安寺御繩除地											
天正二十一年子安分御繩打											
御役人中											
岩下源太 判											
柳下源六 判											
石井弥左衛門 判											

②慶長元年(一五九六)年居住者

其後山開昌被仰付面々は被下候、依之申年御年貢納帳云					
宮内	兵部	将監	高松坊	左京	六郎左衛門
大重坊	清養坊				

大門坊	東觀坊	塙正坊	円地坊	滝本坊	知行坊	龜本坊	多方坊	満蔵坊	庄福坊
				(子安明神上滝本屋)	(子安観音前茶屋)				

福宗坊	西林坊	順正坊	真蔵坊	密蔵坊	實蔵坊	半学坊	養善坊	長泉坊	養学坊

東福坊	大林坊	泉明坊	大光坊
(出典 手中正蔵「大山寺社稷丸裸」より。○印は原文ママ。)			

慶長十四年八月二十八日、家康は、関東諸寺家中に対して黒印状「関東古義真言宗法度」<sup>16</sup>を発令した。同じ日、本寺高野山遍照光院頼慶は、「大山寺諸法度」を大山寺八大坊に下した。この法度は全七条あり、三条 堂内堂外の清掃、四条 外出時袈裟着用、五条 輪番・年預、六条 十二坊宛一人同宿の義務を規定し、清僧の勤め、女人結界地条件付立入、妻帯・山伏・在家らの本尊供所への立入禁止などの内容が以下である。

〔史料 3〕<sup>17</sup>

- 一条 毎月五日報恩講 十一日神明法案 十五日鎮守法案 二十一日報恩謝徳 二十八日本尊法案  
五問一答 以上五カ日寺僧各出仕堅不可有懈怠事 講問論議 講問一講 講問論議
- 二条 自前不動上女人結界勿論也 然共於不動參詣之女人者自辰具至申具可許可之事
- 七条 本尊御供所之取次清僧坊之外不許可妻帯之手傳事
- 付 手長其他之御供若清僧之外欲取次者以誰可供之哉、堅押御供可及其沙汰、猶無承引者可拂坂本山中者也

第二条は、不動尊参詣のために午前八時より午後四時に限り女人立入を例外とした。第七条で本尊への御供所取次は清僧に限定し、宗教的行為における妻帯・山伏の介入を厳禁した。

家康の大山寺掟書・関東古義真言宗法度、本寺頼慶の大山寺諸法度は、八月二十八日權威を以って一斉に発せられた。これら発令の背景は、大山寺坊中に集住していた妻帯・山伏・在家らの勢力がいかに強力であったことの反映といえる。

頼慶は、同年十一月八日さらに「改申諸法度之事」<sup>⑱</sup>を下し、正月修正の法事、正・五・九月大般若經奉納、二月神事之事、山内諸堂社散銭の進退等々は清僧が勤めることを再度規定した。この「改申諸法度之事」の一項に山伏の関与を認める定めがある。

#### 〔史料4〕

一 二月神事之時、近年山伏衆施儀 理運ニ申懸、十二坊舎不便之儀上仁雜掌令迷惑儀、(中略) 然者山伏衆振舞可為如形、朝者惣次赤飯也、神木引終而後者木具土器一円停止也、飯膳者本膳三菜二之膳一汁菜點心一種吸物一遍酒前後五献 但、神木山伏者八木一駄鳥目一貫文可有祝儀也、此外六ヶ敷儀一円不可用之(以下略) 掟書・法度類の中で、二月神事に限り唯一、結界内で山伏の関与を認めたのである。次に下山した修験・山伏のその後の動向である。

## 2 大山寺と山伏・御師の争論

寛永十六(一六三九)年一〇月、大山寺堂宇修復料として金壹萬兩が下賜され、同二十年四月一日に本堂・本宮四社・楼門・本地堂・前不動などが完成した。<sup>⑲</sup>この大山寺大修理の二〇年後の寛文三(一六六三)年五月、大山寺別当第四世隆慶の代、大山寺領の地頭に対し山伏・修験・御師らが徒党を組む争論が発生した。争論の内容は不

明だが、役人井河内・加々甲斐から八大坊に次のような処分が申渡された。

〔史料5〕<sup>20)</sup>

相州大山寺別当八大坊と同所寺領之山伏并御師就爭論申渡覺

双方令糺明処、山伏御師申立段、為指儀無之候ニ、対地頭大勢結徒党候罪科就難遁候、山伏教藏・同駒形・同大重・同大宝・同福本并御師吉兵衛・長右衛門・七郎右衛門・八郎右衛門・八兵衛儀右衛門・大学、此拾二人令籠舎候事

従先年山伏於度々対八大坊及公事候間、此度八大坊寺領之内山伏共令追放候事、

藤之坊・篠之坊・繁昌坊、此三人者今度徒党之列ニ不相加候間、如本立修験道可罷有、但、向後惣領老人ニ相讓修験道不可立別家事

一 駒形坊・同親浄慶・同弟三左衛門・角之丞并最教坊・吉兵衛、此六人大山之六里四方ニ不可罷有事

一 同所無動庵・正庵寺・大用寺、此三人寺令追放致事

山伏・御師らの訴えは不当として、山伏五名・御師七名は籠舎、藤之坊・篠之坊・繁昌坊を除く山伏は大山寺領から永追放、山伏の駒形以下六名は大山の六里四方立入禁止、無動菴・正庵寺・大用寺は追放、とする処罰の内容である。

この争論の四十五年前の元和四（一六一八）年八月、八大坊第二世実栄の代に、年貢納入した山伏三六坊名が坂本村に存在していた。<sup>21)</sup>

### 3 御師の活発化

寛文三年の争論は、別当八大坊が掟書・法度類以降も一定の勢力を残していた修験・山伏を大量処分したこと、

この当時、すでに御師が存在したという点で注目される。この以降、御師による檀那の保有、檀那の資産化、檀那の売買の動きが活発になった。前不動下の坂本村の御師の佐藤藏人は、寛文五（一六六五）年相模国都筑郡（横浜、橘樹郡（川崎）付近に檀那を保有し、その当時十二村の四百七十軒を二十二両、一軒当たり一九疋で売り渡し、その後この御師は、たびたび檀那の売買を行っている<sup>22</sup>。

・寛文十（一六七〇）年四月、相模国三浦郡大津二二〇軒を一三両（一軒につき二四疋相当）

・延宝三（一六七五）年十一月、西上総国峯下領旦那場四八八軒を二二両（一軒一八疋相当）

・延宝五（一六七七）年八月、相模国三浦郡惣旦那場二三〇軒を六両（一軒一〇疋相当）

# 小括

(1) 家康の掟書や高野山遍照光院頼慶法度を通じ、妻帯・山伏・在家と名指された修験・山伏は、当時、檀那からの祈禱料や山内諸堂舎の散銭を得、大山寺本尊の手長供に関わる一方、豊臣秀吉掟書にみられる戦時要員の側面があった。

(2) 大山寺別当八大坊一世実雄や本寺頼慶は、大山寺の再興に際し障害となる修験・山伏の勢力を排除するため、前不動以上の寺域を結界と定め彼らを下山させた。同時に徳川家康の掟書をもとに大山寺を修学と所化衆教化の古義真言宗中本寺として位置づけた。

(3) 家康掟書、頼慶法度によって下山させられた修験・山伏は、半世紀余りの間、旧勢力として勢力を保ち、実雄・頼慶の支配が不安定であったことを寛文三年の争論は示す。この争論を転機に下山した修験・山伏らが御師へ転身し、檀那場における参詣者獲得の活動が活発化した。

御師活動が活発化するこの時期以降、大山信仰は、周辺地域に拡大するがこの動きにともない檀那を獲得する競



争や参詣者宿泊の権利をめぐり、御師間や御師・百姓との間で争論が発生するようになった。そのような争論と別当八大坊が定めた山法との関係を次章で検討してみる。

## 第二章 争論と大山寺山法

### 1 八大坊四世隆慶の山法

寛文三年に発生した争論の一〇年後、延宝二（一六七四）年三月、八大坊第四世隆慶は、御師の檀那掠奪の禁止及び参詣者の宿泊は持分御師の有無の吟味などを課する全十条の山法を定めた。

〔史料6〕<sup>23)</sup>

師職之者其就数年之強訴遂吟味申付寛

#### 第一条（他人檀那奪取の禁）

他人之檀那を奪取、自分之業となす条重科不浅候之間、往古より其誠嚴重也、自今以後猶以禁止置事

#### 第二条（参詣者宿泊時、持分御師有無吟味の規定）

道者参詣之砌一憩信宿之競望有之時者、其仁御師有之哉否随分詮儀いたし、御師無之仁ニ埒明候者宿可仕儻各別御師有之道者ニ宿借シ候族者、為過料道者老一人ニ付金子老兩宛其道者之御師処へ宿主并五人組致持参可相渡、素麵蕎麦切等之店屋物商売茂右同前たる間、渥分御師之致穿鑿御師無之ニ落着之上家内へ請し入へし

#### 第六条（制外御師有無の吟味）

御師無之道者ニ薪質旅籠ニ而宿借候ハ、制外組御師有之歟否之吟味右同断

#### 第七条（強引な宿泊客引の禁）

新賃旅籠店屋ニ而宿借有之時、左右前後之家々門々其直段いたし、手招袂を引或者言語ニ騎詰を吐私欲を專ニ見苦敷消息、甚以比興至極一山之恥辱ニ候之間、左様之無作法向後堅無用たるへし（以下略）

第八条（祭礼時の出店・物売の場合の御師有無確認の規定。以下略）

第三・四・五条は、第一・二条に関する罰則規定である。第九・十条は、無尽講参詣に関する規定で御師有無の義務を問わない制外規定である。

各地の檀那場における御師の持分檀那が確定している場合、他の御師はこれを絶対に掠奪してはならないとするのが第一条である。この条目は御師間の紛争を防止する最も基本的な定めとなる。この第一条の関連規定が、参詣者宿泊時に持分御師有無の吟味を義務ける第二条である。第二条の参詣者の持分御師有無の吟味原則に関連する規定が第六・七・八条となっている。寛文三年以降、大山参詣が盛んになるにつれ御師の檀那保有の権利化が進み、それに伴い参詣者の宿泊をめぐる客引きが激化し、これを取締る山法が出された。

## 2 大山御師と子安村百姓の争論

第四世隆慶の山法後、元禄一五（一七〇二）年二月、別当第六世開蔵の代に大山御師惣代の青木左大夫・和田宮内・佐藤玄栄・内海刑部大夫らが坂本村に隣接した子安村百姓の利兵衛・利左衛門・権之助を奉行所に訴えた。この訴えは、四世隆慶の山法第二条・第六条に関係する次の内容である。

〔史料7〕<sup>24)</sup>

一 相州大山八大坊寺領師職共之儀、田地一円無御座、先規に相定候旦那者不及申、其外参詣道者宿坊仕、手長御供護摩等取次仕大勢之者共渡世相送、例年神事祭礼等相勤申候、然二近年大山入口子安村百姓共新旅籠屋を仕立、大山道筋馬士駕籠兒等二内々ニ而手引を拵、師職之様ニ申なし参詣道者留「        」ル（中

略)御吟味之上子安村者共前々通田畑濃(ママ)業相勤旅籠屋一切御停被遊、寺領之師職相立候様ニ被為仰付被下候ハ、難有可奉存候、以上

大山御師の家屋は、前不動下の大山川河岸に沿う参詣道両側に建ち並び、後ろは山が迫る立地で田畑がない坂本村にある。したがって、旦那保有、参詣者の宿坊、大山寺への手長御供護摩取次を御師の生業としていた。ところが、近年隣接する子安村百姓が新規に旅籠屋を仕立て御師もどきの商いをしているので止めさせるよう訴え出た。訴えられた子安村百姓らは、翌三月に次のような反論を奉行所に提出した。

〔史料<sup>26</sup>8〕

乍恐返答書以御訴詔申上候事

一大山子安村之儀者、八大坊領坂本町迄入会、惣而町通廿町余之所、家員貳百五拾軒余御座候、依之先規代々旦那場所持仕御師致来候、其外之者共ハ大山参詣之道筋之町宿先規仕来、手長御供護摩之儀前々ら八大坊領町之者共同前二山上十二坊取次仕渡世送来候所ニ、坂本・別所・新町之者共「」思立先規古来之儀を新規之様ニ偽「」申掠迷惑ニ奉存候事

(中略)

一大山子安町之者共、八大坊領ニ御師御座候而牛王札取初尾等納来候由申上候、此儀も偽ニ御「」又子安町ニ而山上之牛王札等売買仕候由□子安町ニ而右之儀売買仕候者無御座候(以下略) 以上

大山寺寺領には元来町数二〇町余、家数二五〇軒余あり、前々より子安村の中にも檀那を保有する御師がいて活動していた。子安村百姓は、大山寺領内で以前から手長供・護摩供を行っており、山上の十二坊に対して取次ぐ渡世をしていた。大山御師の言い分は、まったくの迷惑である、と全面的に反論した。さらに、山上の牛王札の売買こそしてはいないが、山下では牛王札を配り初穂を納めてきた事であり、重ねて大山御師の言いがかりと強調して

いた。

子安村百姓の反論「八大坊領坂本町迄入会、惣而町通廿町余之所、家員貳百五拾軒」は註(13)で触れた家康の大山寺領の安堵を指す。争論の対象地域は、前不動以下の坂本村・上子安村・下子安村である。御師訴状の大山入口は、新町と上子安村との境を指し、子安村百姓の反論の入会とは、寛文七(一六六六)年の洪水により新町は流地となったため上子安村の飛地と替地したことを指す。<sup>(27)</sup>これら村の石高は、坂本村七二・七〇〇石、上子安村三五・五一三石、下子安村一六九・七六五石である。<sup>(28)</sup>坂本村御師と子安村との御師争論の背景には、大山寺領内における権益、村石高の差、替地などの事情から生じたと思われる。

この一件は、吟味により翌四月、子安村百姓の全面的な敗訴で決着した。

子安村百姓には、八大坊による御師の免許がなく、牛王札の板木は取上げとなり、以後、旅籠屋経営は廃止、大山御師の参詣人の宿泊禁止となった。この裁定により、子安村百姓による大山寺への宗教的行為は一切禁じられた。

### 3 八大坊六世開藏の山法

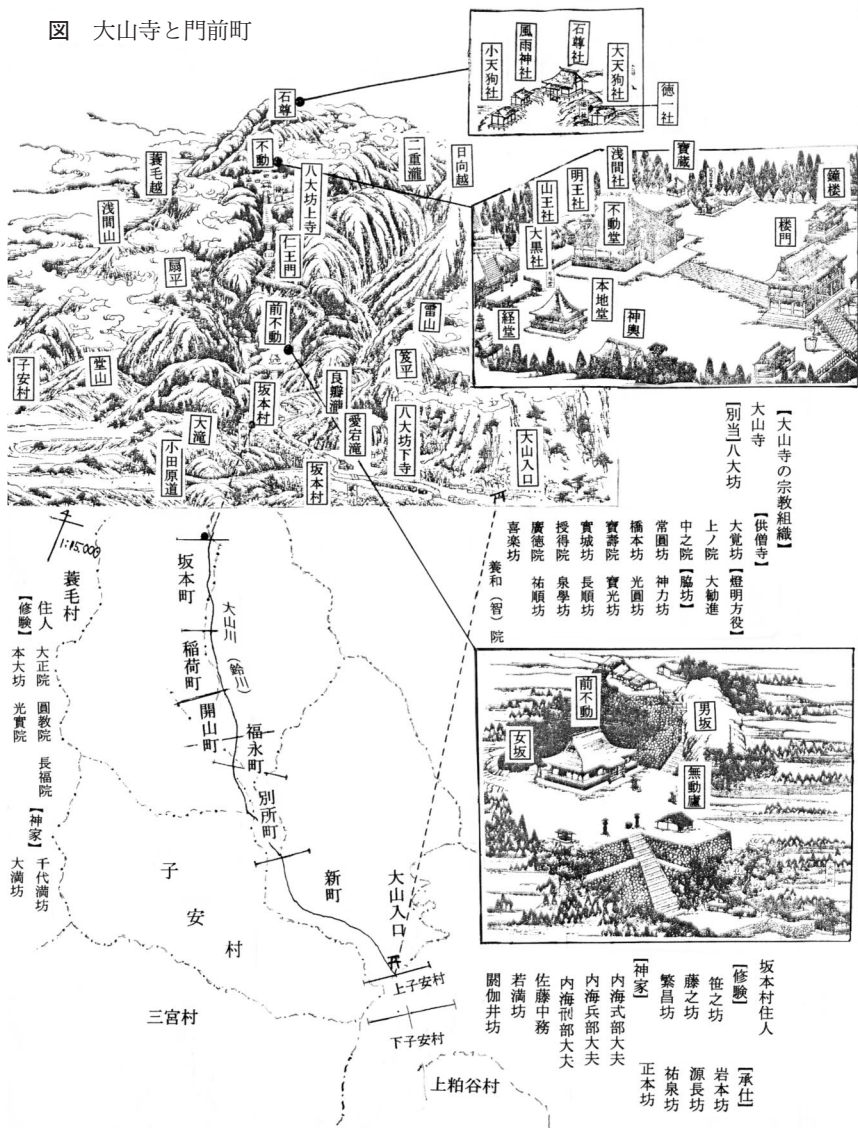
大山御師と子安村百姓との争論後の元禄十五年八月九日、別当第六世開藏は、新規に山法五条を定めた。そのうち、第一条は、参詣時の馳走代・宿泊賃高値の抑制、第三条は、不伝神道并諸祈禱之禁止、第四条は諸商売高値の抑制規定である。この年の二月・四月の争論を反映して次のような規定が設けられた。

〔史料<sup>(29)</sup>9〕

#### 第二条(正路取次の定)

有来り候諸祈禱之取次、弥正路ニ可相勤之事附、御供料金子壹分、且方より遣之候節、御供輕クいたし候儀ハ不可然候、自今以後左様節者護摩料之通当番坊中へも遣之、尤御膳相備供師罷出候義依其品相頼可申事

図 大山寺と門前町



(山図・宗教組織は『新編相模風土記稿』巻之五十一 雄山関による)

# 第五条（他人檀那の押留、牛玉札配布・乞売商売の禁）

他之檀那押留メ候儀、先規之通一切可為停止并牛玉札旦方江相配候外、乞売商之儀堅可為停止事

第二条の「有来り候諸祈禱之取次、弥正路ニ可相勤之事」は、大山御師が子安村百姓を不当と訴えた内容であるが、この職分を御師の専権として百姓の介入を排除し、「正路」取次に規定した点で注目される。各地域の檀那からの諸祈願を請けた御師は、「当番」の十一供僧寺を通して大山寺へ手長御供・護摩御供を取次ぐ仕組を「正路」と規定された。第五条は、四世隆慶の山法第二・六・七条を踏襲する内容である。

前不動より上が清僧の支配領域であることを前章で触れたが、宝永四（一七〇七）年当時の前不動における祈禱料は次のよう設定されている。

護魔金百疋、神馬金百疋、御前三膳金三百疋、大般若金三両貳歩、

手長供金三両貳歩、手長神樂金七両貳歩、大手長金五拾両、太々手長金七拾五両<sup>(20)</sup>

檀那または参詣者が奉納する諸祈願祈禱料は、前不動を経由し供僧十一寺院を通じ、八大坊へ上納されたが、諸祈願祈禱の取次の中でも手長供・手長神樂の奉納金は、少なからぬ経済的側面を有する。

六世開藏は、この九年後の享保六（一七二一）年九月、再度五か条の山法を制定した。この山法のうち、第二条は他人檀那宿泊時の過料、第三条は参詣者宿泊時の持分御師の有無吟味、第四条は無尽講の御師有無の制外、第五条は神事祭祀時の休息・出店御師有無の制外規定である。この山法の第一条は、御師の身分と職分に関する規定で、次の史料がその内容である。

〔史料10<sup>(21)</sup>〕

## 第一条（御師身分・職分の定）

御師職之儀、農にあらず工にあらず商ニ而もなく誠に遊民之類にして、神仏之遺風を守り相応之祈願祝禱を

勤在々所々旦那を定、参詣之節者、是を止宿せしめ或者折々牛玉札守遣シ初尾受納せしむるを以家業とす、其師檀相濫せず自他之家業相奮ハさるを以本意とす、然に縁を求内通を頼他之旦那を侵取んとする事理不尽之至其科不輕候、右之類者其職を召放領地之内可令追外事

他に生産手段を持たない御師の身分を「遊民の類」と位置づけ、御師の職分は、檀那場の祈願祝禱を請負、檀那を定め、参詣者の宿泊、牛玉札守の配札、初穂の受納を家業とすることと規定された。加えて、御師・旦那関係を乱さず、他人旦那の掠奪を禁ずる、という内容である。いわば御師の專業規定といえる。六世開蔵の山法は、元禄十五年の「正路取次」と併せ、修驗・山伏・御師らを別当八大坊の支配の下に身分と職分を定義づけ、檀那・御師・供僧寺院・別当八大坊の宗教的な媒介回路を組織化した点で注目される山法である。

#### 4 大山御師・子安村争論の再燃

元禄一五年の大山御師と子安村百姓との争論以後、六世開蔵によりこのような山法が制定されたが、大山御師の青木左大夫・和田宮内・佐藤玄栄・内海刑部大夫の四人は、宝暦二（一七五二）年一〇月、再度、子安村百姓に加えて隣接する上粕谷村百姓四十三人を訴えた。訴えは、檀那保有や初穂受入の御師行為は減少したが、子安村・上粕谷村では参詣人を留置く旅籠屋や売女を抱え置く宿が横行しているという内容である。この争論は、十か月に及んだが、吟味の結果は子安村・上粕谷村における大山御師持ち参詣客の宿泊はあらためて禁止された。<sup>(33)</sup>

#### 小括

(1) 寛文三（一六六三）年大山寺と修驗・山伏・御師の争論後、别当四世隆慶は、延宝二（一六七四）年檀那場における他人檀那の掠取を厳禁し、参詣者の宿泊については他人御師の檀那の宿泊を禁じ、御師活動の規範とな



る山法を定めた。

(2) 別当六世開藏は、在任中に二度の山法を定めた。

一度目は、元禄十五（一七〇二）年の大山御師・子安村百姓の争論後、大山寺本尊に対する諸祈願祝禱は百姓の関与を排除する仕組を「正路」取次とする山法を定めた。

二度目は、享保六（一七二一）年、御師を「遊民の類」と規定し、御師の職分内容を明確にし、別当八大坊を頂点にした支配の体制を確立にした。そうした山法の制定にも拘らず現実には、法外・逸脱行為が発生した可能性は低くはない。

### 第三章 大山寺別当・供僧寺と御師の祈禱取次の回路

結界地を前不動以上、それより山下を俗人の居住区域と定めたことは第一章で触れてきた。手長供は、慶長十四年の頼慶の「大山寺諸法度」、「改申諸法度之事」の中で繰返し触れられた祈禱行為であるが、結界域や本尊への手長供の定は、妻帯・山伏・在家ら修験・山伏を僧侶の支配領域から排除する目的で下された。元禄末・享保期、修験・山伏が御師化するにつれ別当八大坊の支配が浸透したとみられる。

他方、修験・山伏から御師への転身により、檀那場における御師と檀那、坂本村における参詣者（檀那）と御師、前不動における御師と供僧寺院、結界内における供僧寺院と大山寺別当の関係は、本尊に対する檀那の諸祈願祈禱を献ずる宗教的に媒介する仕組みを通して、元禄末・享保期を境に一層組織化されたといえる。

#### 1 大山御師の書上

六世開藏が享保六年に定めた山法の約半世紀後、天明六年当時の大山御師の総員が明らかとなっている。その内



容が、表2「天明六（一七八六）年坂本上分三町・下分三町御師表」である。この原史料は、既出の「大山寺社稷丸裸」より作成したものである。この史料の前書には、慶長十四年以後、前不動以下に下山し、御師に転身した修験・山伏が、御師の出自や新旧の情報が記されている。

〔史料11〕<sup>34)</sup>

一 三拾六坊居屋敷之義ハ免状頂戴有之候得共、下山已来者寺務八大坊江年貢相納メ申候、古来記録由緒具ニ有之候得共、一百年已前八大坊修験中出入有之及公訴、修験中一同ニ俗御師とや成申候、無是非事二年を歴ル者也

一 相州大山寺修験三拾六坊并ニ脇坊式拾四坊・柴焼山伏・惣御師・新御師名前如左

元修験・山伏の他に惣御師・新御師の区分けがされているが、これを書上げた明王太郎景直の表記によるものでその基準は不明である、古くから存在した御師、比較的新しい御師程度の意味である。

表2の原史料は、上段が御師区分、中段が履歴情報、下段が御師名の順に記載されているが、表2は、比較の便宜上、御師名・坊名・元職（または兼帯職）・取次寺順に編集した。表中の○印は、原史料中の本坊（修験三拾六坊）、△印は、脇坊式拾四坊（山伏）に付された記号である。○・△印の●▲印は、その中で註(21)の元和四年当時、年貢納入の三六坊に該当する御師である。

御師個々の把握をするため、原史料の御師記載順に御師コードを1～140に付した。1～52までが坂本上分三町、53～140が坂本下分三町に属す御師である。表の最下段のA～Lは、後出の表3「文政七（一八二四）年大山寺護摩取次坂本上分三町・坂本下分三町御師」の別当八大坊・供僧十一寺院に対応する記号である。御師の内訳は、修験三六坊（原史料の実数は三九坊）・脇坊二四坊（原史料の実数は三二坊）・柴焼山伏二坊・惣御師（無印）三七名・新御師一七名・神職八名で合計一三五名である。修験・山伏は合計七三名で御師総員に対する割合は

表 2 「天明六(一七八六)年坂本上分三町・下分三町御師表」

【坂本上分三町(坂本・稻荷・開山) 御師】														
コード	御師名	履歴	坊名	職種	取次寺									
1	瀧守坊	○	元東林坊		C・H	3	5	3	4	3	3	3	3	3
2	柴田楠太夫			商人	C・D	2	8	2	7	2	6	2	2	2
3	武蔵太夫		昔駒形坊	商人	D	3	9	3	8	3	3	3	3	3
4	箱崎佐太夫	△			D	4	0	4	1	4	4	4	4	4
5	根岸權太夫(式部)	(△)	根岸式部	[年寄]	C	5	0	5	0	5	0	5	5	5
6	小川大膳	△			D	6	6	6	6	6	6	6	6	6
7	佐藤中務[大隅守]	神職		神主	C	7	1	7	0	7	0	7	7	7
8	佐藤大学	△	大石坊		D	8	8	8	8	8	8	8	8	8
9	井上内藏助	△	正本坊	[年寄]	E	9	9	9	9	9	9	9	9	9
10	浅田式部	△			D・L	10	0	10	0	10	0	10	10	10
11	浅岡修理	△			E	11	1	11	1	11	1	11	11	11
12	石黒大藏	△	石黒坊		C	12	2	12	2	12	2	12	12	12
13	和田仲大夫	○	滝之坊・大門坊	[名主]	K	13	3	13	3	13	3	13	13	13
14	原田平陸		平陸坊	酒屋	H	14	4	14	4	14	4	14	14	14
15	佐藤津太夫				J	15	5	15	5	15	5	15	15	15
16	佐藤万大夫(林大夫)	○	梅本坊		C	16	6	16	6	16	6	16	16	16
17	逸見舎人				E	17	7	17	7	17	7	17	17	17
18	青木将監			商人	F	18	8	18	8	18	8	18	18	18
19	真下多宮	(△)			J	19	9	19	9	19	9	19	19	19
20	佐藤図書	△			C	20	0	20	0	20	0	20	20	20
21	佐藤織部	△	観行院	[名主]	B	21	1	21	1	21	1	21	21	21
22	永野彈正	○			B	22	2	22	2	22	2	22	22	22
23	間下彦大夫	△		豆腐商人	C	23	3	23	3	23	3	23	23	23
24	太田菊太夫(丹後)				F	24	4	24	4	24	4	24	24	24
25	佐藤蔵人(彈正)	△	一楽院吉祥坊		I	25	5	25	5	25	5	25	25	25
26	真里谷主馬	○			F	26	6	26	6	26	6	26	26	26
27	猪俣儀太夫	新			B	27	7	27	7	27	7	27	27	27
28	佐藤主水	△			D	28	8	28	8	28	8	28	28	28
29	村山頼母	神人		神人	K	29	9	29	9	29	9	29	29	29
30	下山治部太夫(新太郎)	新		[名主]	B	30	0	30	0	30	0	30	30	30
31	古宮幾太夫	△			B	31	1	31	1	31	1	31	31	31
32	佐久間字太夫	柴	林光坊		D	32	2	32	2	32	2	32	32	32
33	大藤玄藩	△	高松坊寛善坊事		F	33	3	33	3	33	3	33	33	33
34	佐藤大住	△			C・D	34	4	34	4	34	4	34	34	34
35	大木宮内	△			H	35	5	35	5	35	5	35	35	35

【坂本下分三町(別所・福永・新町)御師】														
コード	御師名	履歴	坊名	職種	取次寺									
36	水嶋内匠	△	桜井坊		D	36	6	36	6	36	6	36	36	36
37	相原主殿	●			D	37	7	37	7	37	7	37	37	37
38	「亀井」藤之坊	●			D	38	8	38	8	38	8	38	38	38
39	武蔵助之進	△			C・G	39	9	39	9	39	9	39	39	39
40	渡部伴内	△			H	40	0	40	0	40	0	40	40	40
41	新見治太夫	△			G	41	1	41	1	41	1	41	41	41
42	尾崎主計	△			H	42	2	42	2	42	2	42	42	42
43	吉川領太夫	△			E	43	3	43	3	43	3	43	43	43
44	酒屋孫右衛門	○			D・J	44	4	44	4	44	4	44	44	44
45	常観坊	△			B	45	5	45	5	45	5	45	45	45
46	久保藤内	△			G	46	6	46	6	46	6	46	46	46
47	木村播磨[友之助]	△			F	47	7	47	7	47	7	47	47	47
48	津田武太夫	○			I	48	8	48	8	48	8	48	48	48
49	神崎文内	○			I	49	9	49	9	49	9	49	49	49
50	小芦五太夫	○			I	50	0	50	0	50	0	50	50	50
51	永野(崎)重太夫	●			B	51	1	51	1	51	1	51	51	51
52	丸山要助	●			A・B	52	2	52	2	52	2	52	52	52
53	相原但馬	●			D	53	3	53	3	53	3	53	53	53
54	奥村屋敷也	○			J	54	4	54	4	54	4	54	54	54
55	目黒久太夫	●			J	55	5	55	5	55	5	55	55	55
56	奥村庄太夫(三郎)			商人	B	56	6	56	6	56	6	56	56	56
57	岡本喜内			酒屋	D	57	7	57	7	57	7	57	57	57
58	浜田徳太夫				B	58	8	58	8	58	8	58	58	58
59	「三橋」藏金[全]坊	○			D	59	9	59	9	59	9	59	59	59
60	「大森」金[全]泰坊	○			F	60	0	60	0	60	0	60	60	60
61	大谷安之進	新			F	61	1	61	1	61	1	61	61	61
62	鈴野勘太夫	新			B	62	2	62	2	62	2	62	62	62
63	小川準人	●			B	63	3	63	3	63	3	63	63	63
64	佐藤奥太夫	△			E	64	4	64	4	64	4	64	64	64
65	小林甚大夫	(△)			B	65	5	65	5	65	5	65	65	65
66	「柏崎」願成坊	●			G	66	6	66	6	66	6	66	66	66
67	小笠原石京	●			G	67	7	67	7	67	7	67	67	67
68	逸見民部	○			D	68	8	68	8	68	8	68	68	68
69	鈴野善太夫	○			D	69	9	69	9	69	9	69	69	69
70	神崎茂太夫	○			L	70	0	70	0	70	0	70	70	70
71	平田喜太夫	●			I	71	1	71	1	71	1	71	71	71

近世期における相模大山御師の形成過程

108	内海三太夫	○	神職	常善院吉本坊	E
107	内海式部〔草柳源太夫〕		正楽院孫	元代官	B
106	反田松太夫			苗ふれ御師	A
105	金子石〔宇〕内				A
104	和山金太夫				A
103	中山内記〔因幡〕			元名主〔代官〕	D
102	〔沖津〕萬善坊	○	如法院孫	塗師	I
101	芝平内	○	大意坊孫	商人	J
100	高尾左仲	○	悦善院孫	商人	D
99	新宮數馬			元名主	E
98	善祥坊〔宮本太夫〕				B・G
97	和田増太夫				B
96	須藤内膳	新			C・D
95	笹子嘉太夫				H
94	長野仁太夫				K
93	中村小四〔八〕郎	(△)	柳坊之孫		E
92	須藤尉太夫	△	大教坊孫		F
91	和田岩太1夫				C
90	村山八太夫	○	東善坊孫	〔名主〕	D
89	下山吉太夫〔三橋六太夫〕	○	松村坊		F
88	江藤伊織	●	月藏坊孫		F
87	神崎半太夫		泰藏院屋敷也		H
86	山田平馬	(△)	東田坊孫	〔目付〕	D
85	武藤左近		菊本坊	商人	E
84	府川幸太夫				C
83	伊東右近	△		元八大坊代官	B
82	瀧淵坊	新		かし屋	C・D
81	増田源之進	新			A
80	沼野掃部〔右内〕	新		〔目付〕	D
79	平田政太夫	△		商人	B
78	石原安太夫				B
77	岡田伊太夫	●	山之坊孫	〔年寄〕	H・I
76	今坂徳之進	●			B
75	佐々木久太夫				B
74	石井長太夫				B
73	和田毅負	●	山本坊孫		I
72	神崎富太夫	●	常光坊孫		B

109	矢野出雲守	神職	吉田神帳	〔年寄〕	E
110	大木利太夫				D
111	磯部要人〔多大夫〕	新			D
112	原市太夫〔又五郎〕				D
113	笹之坊	○			D
114	岡部〔崎〕岡太夫	●	秀光坊中室院	〔名主〕	L
115	成田縫〔殿〕之助	○	成田坊治大夫ト		C
116	飯田平太夫	△	円明坊孫		I
117	横山惣太夫〔治兵衛〕		大工棟梁明王太		C
118	小川監物		郎子孫		D・G
119	鈴村兵庫〔治左衛門〕	△		〔名主〕	B
120	青木左京				L
121	大高斎宮			子安分百姓	H
122	和田主水	●	三光坊孫		H
123	内海平太夫				D
124	宝泉坊	○	大学院		B
125	高橋七朗大夫	新		素麵屋商人	B
126	和田菅大夫	新			D
127	小笠原勝之進	新		豆腐商人	B
128	和田銀大夫	新			G
129	和田奎太夫	新			G
130	沼野多内	新			G
131	沼野嘉内	新		豆腐商人	B
132	佐藤中務	神職	#7と重複	神主	D
133	内海刑部大夫	神職		神家	B
134	内海兵部太夫	神職		神家	D
135	内海式部大夫	神職		神家	B
136	若満坊	神職		神座	B
137	関伽井坊	神職		神座	B
【養毛分御師】					
138	大満坊〔養毛住〕	親		親座	
139	浄満坊〔養毛住〕	親		親座	
140	本大坊〔養毛住〕	親		親座	

成(手中正所蔵「天明六年大山新町手中明王太郎景直大山寺社稷丸裸」をもとに作

五四％に達する。惣御師の中で、坂本上分で官途成を付す御師は天正二十一年以来の後継者とみられる。修驗・山伏以外の出自または兼帯は、商人が一九名（一四％）を占め、百姓は、子安村大高斎宮一名のみである。惣御師の中の職種は、兼業か専業かはこの表からは断言できない。

坂本上分・下分計六町の御師を坂本村全体に占める割合をみるため、享保二〇（一七三五）年当時の高野山高室院の大住郡「川西檀廻帳」<sup>(35)</sup>と照合した。この檀廻帳の記載と合致する御師が表中のアミ掛の御師である。この檀廻帳から御師を除く坂本村の住民構成は次のようである。なお、表中の御師名の（ ）は、「大山寺社稷丸裸」の、「」は「川西檀廻帳」の書上の異名である。

坂本上分三町非御師住民合計一六三名

職種別商人（挽物屋八、榎木屋五、豆腐屋二、車屋二、香具屋・菓子屋・饅頭屋・米屋・仕立屋・塗師・古着屋・八百屋各一）二五名

屋号持商人二九名、苗字持住人二名、苗字無住民一〇七名

表2の坂本上分三町御師は合計は五二名であるから住民総計は二一五名となり、坂本上分三町全体の二四％にあたる。

坂本下分三町非御師住民合計一〇一名

職種別商人（鯺鮓屋・桶屋・穀屋・猿子屋・猿渡屋・塩屋・畳屋・茶屋・豆腐屋・塗師屋・八百屋・飯屋各一）一二名、屋号持商人二五名、苗字持住人一二名、苗字無住人五二名

表2の坂本下分三町御師は合計は八三名であるから住民総計一八四名となり坂本下分三町全体の四五％にあたる。坂本上分三町は、住民全体の四分の一、坂本下町三町では、住民の半数を御師が占める。享保二〇年「川西檀廻帳」と天明六年坂本上下御師表との間には、半世紀の開きがある。表2中の無印の惣御師・新御師の多くはこの期

間に新しく発生したと推定される。

## 2 別当八大坊・供僧十一寺院と大山御師との関係

第一章で触れたように、前不動は、別当八大坊と供僧寺院が専ら支配する結界の地で、前不動上は、僧侶以外の立入が禁じられた。檀那及び霊場参詣者の諸祈願祈禱は、前不動以下門前町の大山御師を媒介にして供僧寺院、別当八大坊へ取次ぐ仕組みが享保期頃から次第に組織化されたようである。その仕組を一覧にしたのが表3「文政七（一八二四）年大山寺護摩取次坂本上分三町・坂本下分三町御師」である。この表は、「坂本町別所町蓑毛諸師職護摩取次寺印鑑」から作成した。

表3の原史料は、御師のランクを師職上通串号・中通・次通の三種に設け、坂本分・別所分別に書上げされている。ただし、蓑毛御師は、上・中・次通の区分はない。御師ごとの記載は、取次供僧寺・御師名の記載で御師の出自を必要に応じて下段で注記している。

表中の数字は、表2「天明六（一七八六）年坂本上分三町下分三町御師表」の御師コードを八大坊・十一供僧寺院別にそれぞれに対応させたものである。表中の名前と坊名は、天明六年以降、新たに発生した御師である。「\*」印の御師は、供僧寺院へ重複帰属する。供僧寺院単位の取次御師は、中之院五〇、大覚坊四五、授得院四八、宝寿院一八、橋本坊一九、常円坊一九、養智院一六、広徳院一七、喜楽坊一一、上之院八、実城坊五で延合計二三八名に達する。この人数から\*印の重複人を差引くと実数一九八名となり、天明六年当時の御師より、五八名の増員となっている。中でも中之院・大覚坊・授得院の三供僧寺院は、多数の御師を配下に行っている。表3の大山寺護摩取次御師は文政七年の時の書上であるが、原史料の奥書には「享保三戊戌年七月、同十五庚申年正月兩度改之」と明記されている。このことから、この仕組は、別当六世開蔵が元禄十五（一七〇二）年に正路取次、享保六（一七二

【坂本上分三町（坂本町・稲荷町・開山町）】

L	K	J	I	H	G	F	E	D	C	B	供僧十一寺院	A
実城坊	上之院	喜楽坊	広徳院	養智院	常円坊	橋本坊	宝寿院	授徳院	大覚坊	中之院	別当 八大坊	
*10	*祐泉坊	1・8・ *・1・ 4・3・ 2・*・ 2	4・8・ *・4・ 9・源長	8・1・ *・*・ 3・3・ 5・*・ 9	*21・ *・*・ 3・5	20・ 山口見理	1・9・ *・岩本坊	7・2・ *・5・ 3・7・ 8・*・ 3・*・ 4・*・ 4・2・	*2・ *・3・ *・4・ 1・0・ *・*	17・ *・6・ 1・9・ *・1・ 1・*	2・2・ *・1・ 5・2・ 3・3・ *・5・	*52 上通御師
	内海勝太夫	内海万太夫	*41・ *・*・ 1・1・ 0・7	0・15・ *・*・ 4・3・ 3・4	0・41・ *・4・ 小笠原石膳	2・4・ 3・3・ 4・7	藤林太夫	1232・ 3・3・ 6・*・ *・*	夫26・ 9・*・ 2・*・ 2・*・ 5・*・ 3・3・	5・27・ *・31・ 井上清太夫	中通御師	
	衛門・久右衛門・*治左衛門・*戸塚孫右衛門・*戸塚孫右衛門	長左衛門	*戸塚孫右衛門	藤右衛門	伊兵衛	三右衛門・喜兵衛・勘兵衛・權左衛門・重右衛門・善七		新兵衛・八兵衛・喜兵衛後家・太治兵衛・太郎右衛門・石森多内	依左衛門・*治左衛門・四郎右衛門・七郎右衛門	久兵衛・庄治郎	次通御師	

L	K	J	I	H	G	F	E	D	C	B	供僧十一寺院	A
実城坊	上之院	喜菜坊	広徳院	養智院	常円坊	橋本坊	宝寿院	授得院	大覚坊	中之院	八別当	別当
0*70・114・12		55・*56	2*71・1*73・10	*73・94	7*56・*66・*9	*1・87	8*9・108	太田紋大夫 *80・*118・*33・*40・*63・*9	夫19*80・*115・*8 成田庄太夫 *118・*880・*115・*40・*63・*9	*135・蔵全坊 72*71・*80・*97・*133・*97	59*66・*69	中通御師 04・*105・*1
廉目長大夫	93	夫・高尾兵太夫	柳外記 8*62・*135・*6	武市之進 *121・*122・*29・*85	太夫 *131・*宮本戸	78*129・*118・*130・*8	61・86・91	*261・*83・*9 2*矢野清太夫 *溝呂木太夫	3*915・*111 弥太夫・安田勘太夫 *溝呂木太夫	4*273・*57・*6 122・*44・*135	中通御師 06・三橋六大夫	中通御師 79・*1
			勘兵衛		權兵衛	太兵衛	伊兵衛・吉左衛門	菊之坊 123・五平治・	後家 又太郎母・又兵衛 左衛門・金左衛門	衛門 八郎右衛門・嘉右衛門	次通御師	次通御師 平八郎

【坂本下分三町（別所町・福永町・新町）】

5	8	11	17	16	19	19	18	48	45	50	總數
						理兵衛		金藏院・大正院	政太夫 院兵衛・相原藤太夫・根岸 密正院・長福院・円鏡 兵衛・源八・庄兵衛・柏 右衛門・大満坊・岡本甚 太夫・千代満坊・李大坊	養毛御師名 養屋平兵衛・少将・六郎 車屋平兵衛・少将・六郎	總數【養毛分】

二) 年に御師の身分・職分を定めた二つの山法にその原型が存在したこと意味する。

小括

表2「天明六（一七八六）年坂本上分三町・下分三町御師表」から以下が指摘できる。

官途成を付す者は天正二十一年当時の出自の御師、アミ掛けの者は享保二十年頃の御師、○△印及び無印の者は天明六年当時一三八名の御師に増加し、坂本村民全体の過半が元修験・山伏である。商人出身又は兼業の御師は、六世開蔵が御師の身分を「農にあらす工にあらす商二而もなく」と定めた規定に反して多数増加した。

表3「文政七（一八二四）年大山寺護摩取次坂本上分三町・坂本下分三町御師」からは、天明六年以降文政七年にかけて、御師五八名の増加があり、檀那の諸祈願祈禱を別当八大坊へ取次ぐ仕組は、これら御師が別当八大坊の下に十一供僧寺院別、坂本上分・下分別、上通・中通・次通別に重層的に組織化された。この仕組は、六世開蔵の元禄十五年と享保六年の山法に基づいていたのである。

#### まとめ

本稿では大山寺の山法の成立過程や争論を取上げたが、以下のような点を明らかにした。

1 慶長十四年八月の徳川家康掟書、高野山遍照光院頼慶法度から、戦国末期、修験・山伏は大山寺の檀那を持ち、本尊への手長供などの宗教的行為に関与し、かつ戦時の要員であった。

2 これら掟書・法度は、前不動以上を結界と定めて清僧が支配し、修験・山伏を排除したが、寛文三年頃まではその勢力衰えなかった。しかし、この争論前後から、修験・山伏の御師化が活発になった。

3 寛文三年の別当八大坊と山伏・御師争論、元禄十五年の大山御師と子安村百姓争論を経るなかで、別当四世隆

慶・六世開藏は、御師の他人檀那掠取の禁止、参詣者宿泊時の持分御師の吟味義務、御師の身分・職分を定めることで別当八大坊による御師の統制が進んだ。

4 大山御師の初見は、寛文三年以降になるが、その御師は前不動下門前の坂本村住民であり、その半数近くを元修験・山伏が占め、他は、同村の職人・商人・神職などで構成され、隣村百姓民は排除された。六世開藏は、享保六年山法で御師の身分を非農民・非工人・非商人の「遊民」と規定したが、後世の御師には職人・商人出身者が少なくない。

5 他方、別当四世隆慶・六世開藏の山法は、檀那の諸祈願祈禱を御師を通じて供僧寺・大山寺別当八大坊へ取次ぐ宗教的な媒介回路を構築した。表3「文政七年大山寺護摩取次御師」はその完成された仕組である。大山御師は、大山寺八大坊・十一供僧寺院の配下であり、御師一九八名余は、坂本上分・下分・蓑毛分別、上通・中通・次通別に重層的に組織された。

諸祈願祈禱をめぐる大山寺別当八大坊と大山御師との間のこのような宗教的な媒介回路は、他の山岳霊域と比較して共通であるのか、否なのかは今後の課題とする。

# 註

(1) 文化・文政期の大山講は、秦野市『江戸の参詣講』―桃灯と講中札にみる霊場信仰―一九九五年に収録。この他、角川書店『日本国語大辞典』による御神酒の説明には相模大山御神酒講が例示される。

(2) 立正地理学会『地域研究』一四 一九七一年。

(3) 成城大学大学院文学研究科『日本常民文化紀要』八一 二 一九八二年。

(4) 秦野市編さん委員会『秦野市史研究』六 一九八六年。  
(5) 久留島浩他四編『身分を問い直す』吉川弘文館 二〇〇〇年。

(6) 高埜利彦「移動する身分」朝尾直弘編『日本の近世』七卷所収 中央公論社 一九九二年。

(7) 西田かほる「川口村における富士山御師の成立とその活動」高埜利彦監修甲州史料調査会編『富士山御師の歴史的研究』所収 山川出版 二〇〇九年。



(8) 日本山岳修験学会『山岳修験』第一八号 一九九六年。

(9) 「天明六年丙□大山新町小川氏 大山寺社稷丸裸 大山寺宮大工 手中明王太郎景直花押」神奈川県立公文書館蔵所マイクログフィルム。

(10) 法席の期限、稽古には座臘の付添、三年以上本山での修行など所化僧のための九か条の掟を定めた内容。「金剛三昧院文書」「高野山文書」第二巻所収 一九三七年。

(11) 貫達人編『改訂新版相州古文書』第一巻八六 角川書店。一九六六年。

(12) 八大坊の供僧寺院は、大覚坊・上之院・中之院・常円坊・橋本坊・寶壽院・実城坊・授得院・養智院・廣徳院・喜楽坊を指す。「大山史」石野瑛編著『相模大山縁起及文書』所収五七頁 名著出版 一九七三年による。

(13) 大山寺の寺領は、慶長十五年七月十七日付徳川家康黒印状「相模國大住郡大山寺領坂本畠屋敷七拾貳石餘、子安内貳拾七石餘、合百石事」によって支給された。註(11)前掲史料八七。

(14) 註(11)前掲史料八四。この掟書の前の同年四月家康は三項目の禁制を大山に下した。

- 一 當手軍勢、乱妨狼藉事
- 一 剪取竹水事
- 一 放火之事

(15) 註(9)前掲史料。これは三〇葉の簿冊である。筆者は大山宮大工の手中明王太郎景直である。手中明王太郎は、大山寺の宮大工で、伝説上は文觀を初代とし大山寺との関わりが深く宝龜四(七七四)年から昭和二三(一九八

四)年に及ぶ資料が継承者の手中正氏のもとに五一二点が所蔵される。

(16) 法度内容は、本山における修行の方法・期間、能化の資格・役割、古跡寺院住職は学問僧の能化であることなどである。全九条のうち、一・三・四・九は以下である。

- 一 一年兩度法談之日限、堅不可有増減事
- 三 本寺住山必可遂三箇年事

四 雖為本寺住山、不学所學者、不可許能化事  
九 於古跡之一寺一山者、必可令住学匠之能化事  
これらの法度が関東諸寺の家中へ下された。

(17) 註(12)前掲史料六一頁。本寺遍照光院頼慶「大山寺諸法度事」。

(18) 註(12)前掲史料。頼慶印判同文書の高札文に「一 諸堂の散錢納物等宿防(坊) 取次として私に請取儀堅可停止事」「一 手長并諸御供等たんなより請取て宿々に押置儀堅可停止事」と揭示。

(19) 手中正蔵「大山寺古実本記」『伊勢原市史』資料編続大山所収 一九九四年。後出図「大山寺と門前町」参照。

(20) 佐藤良次氏所蔵「寛文三年五月 別当八大坊と山伏・御師爭論につき申渡覚」註(19)同書。

(21) 註(9)前掲史料元和四年山伏書上による。「岩之坊・西之坊・雲之坊・西之坊・城源坊・真守坊・繁昌坊・山之坊・山本坊・密藏坊・月藏坊・新坊・賢城坊・森之坊・三光坊・守大坊・大泉坊・慈眼坊・泉光坊・光藏

坊・草円坊・東陽坊・員林坊・重泉坊・正林坊・秀光坊・常光坊・実藏坊・教藏坊・室之坊・東字坊・真藏坊・満藏坊・正光坊・藤之坊・南藏坊。これら山伏を「大山寺社稷丸裸」に照合すると、教藏・藤之坊・繁昌坊は、元和四年、大重は表1②の慶長元年、正庵寺・大用寺は表1①の天正一九年の書上と合致する。

- (22) 内海正志氏所蔵「寛文五年八月 檀家永代売渡証文」註(19)同書。

- (23) 大藤直兄氏所蔵「御地法書」註(19)同書。

- (24) 「差上申一札之事 元禄十五年午四月十四日 子安村参拾人余判 御領名主 私領組頭不残」 佐藤良次氏所蔵「元禄年中出入一件 宝暦二年より出入願書追訴証拠書」『伊勢原市史』註(19)同書。

- (25) 頼慶の「大山寺諸法度」には護摩供の言及はないが、寛政四年『大山不動靈驗記』第一巻の祈禱年中行事で、護摩供は本尊前にて毎日行いう定がある。

- (26) 註(24)史料。元禄十五年四月十四日「差上申一札之事」。

- (27) 坂本村は、家数三一軒、坂本町・稲荷町・開山町を上分三町、福永町・別所町・新町を下分三町で構成され、地元民は、村名を用いず、大山町と称したという。この坂本村の新町に隣接して上子安村家数七一軒、下子安村五一軒があった。この新町は寛文七(一六六六)年七月

の洪水により、谷筋の大山川(鈴川)の氾濫により川辺の崩れ地が出来、上子安村の飛地を替地して誕生した(『新編相模風土記稿』第三巻大住郡巻五十一 雄山閣一九九八年)。

- (28) 『元禄郷帳』内閣文庫所蔵史籍叢刊五六巻 汲古書院一九八四年。

- (29) 註(23)史料中の元禄十五年八月九日の定め。

- (30) 宝永四(一七〇七)年「當山旧事抜書」宝永四年丁亥十一月廿三日「手中家所蔵史料」マイクロフィルム第一巻七〇。

- (31) 註(23)史料中、享保六年九月の定め。

- (32) 註(24)史料中、宝暦二年十月「乍恐書付を以御訴訟申上候」。

- (33) 宝暦三年七月十日相州大住郡上粕谷村「相定申連判状之事」(宝暦二年坪掛人別割帳 註(19)同書)。

- (34) 註(9)前掲史料中、天明六年御師書上「前文」。

- (35) この檀廻帳は、高野山高室院の使僧が相模国の檀那を廻檀した享保二〇(一七三五)年当時の姓氏名一覧である。この表から坂本村上分・下分を照合した。寒川町史編集委員会『寒川町史調査報告書2』—高野山高室院資料(2)—による 一九九三年。

- (36) 神崎栄一氏所蔵「坂本町別所町蓑毛 諸師職護摩取次寺印鑑写」註(19)同書。